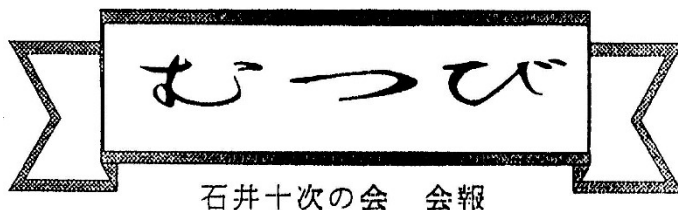


2022年
(令和4年)
9月13日



300号

「一人、本気になれば」

宮崎県市町村教育委員会連合会 会長

(宮崎市教育委員会 代表教育委員) 今門幸藏

天地は一体なり 一人、本気になれば おのずからその響き 世界に広がらん

石井十次先生のことばです。石井先生は、膨大な日記を書き記していらっしゃいますので心に響く名言がいくつも残されています。その中で最も好きなことばが、このことばです。このことばを知ったのは今から三十年前のことです。当時、日曜日の夜「知ってるつもり」というテレビ番組が放送されていました。この番組は、歴史上の人物を採り上げたドキュメンタリー番組で、石井十次先生を採り上げたことがありました。放送当日は、宮崎県の偉人を採り上げるということで、期待に胸を膨らませて見た記憶があります。その番組の最後の方で紹介されたのが上記のことばです。とても感動しました。司会をしていた関口宏氏が、「最後に残されたあのことばがねえ。私たちに、強くせまってくるんですが・・・。一人の人がね、本気になれば、それは絶対響いていくよ。・・・ なんか私たち、自分一人でやったってどうにもならんもんって、すぐ思っちゃいますもんねえ。」と自分に言い聞かせるようにしんみりと話されました。その通りだと思いました。「自分一人でやってもどうにもならない。」そう思って行動しない人たちを、私たちは、実に多くの場面でみかけます。何か寂しい気もします。

ここに一冊の本があります。「ひとりではじめたアフリカボランティア」という本です。著者は、栗山さやかさんという女性です。内容は、アフリカの極貧の地域でひとり本気になってはじめたボランティア活動の話です。

栗山さんは、短大を卒業した後、渋谷のショップ店員を初めいくつかの職業を経験します。そして思うところがあって仕事を辞め、旅にでます。今で言う自分さがしの旅でしょうか。アジア、ヨーロッパ、中東を旅した後アフリカへ向かいます。さやかさんは、アフリカは想像していたより何もかも悲惨だよと友人たちから聞いていました。しかし、そのことばを聞いて、貧しい人たちのためにボランティア活動をしようと決心し、アフリカの地に足を踏み入れます。私はもちろんアフリカへ行ったことはありません。マスコミ報道や雑誌等で知っている程度です。この本を読んで、アフリカはほんとうに貧しくて悲惨な国々が多いということ、その現実を改めて知りました。ページをめくるごとに、次々に悲惨な出来事が目に飛び込んできて胸が痛くなってきました。不衛生且つ不自由な衣食住、蔓延する風土病に苦しむ大勢の人々、大人になることなく死んでいくあまりに多くの少年少女、信じられないほどの治安の悪さ等々、逃げ出したいくなるような話が次々に出てきます。そんな中でさやかさんは、アフリカの中で最

も過酷と言われるモザンビークで、中でも最も開発の遅れた場所で、アシャンテママというNPOを立ち上げます。信じ難いくらい犯罪の多い環境の中で、「人に二つの手があるのは、一つは自分を守るため、もう一つは人を助けるため」ということばを胸に、自分を奮い立たせながら、活動を広めていきます。口では言い表せないような様々な困難に耐えながらの活動は、やがて多くの人に知られることになり、援助金等も集まるようになってきました。そして日本でも、「さやかさんを応援する会」が発足し、現在もさやかさんの活動を支え続けています。

さやかさんの活動は、まさに「天地は一体なり 一人、本気になれば おのずからその響き世界に広がらん」という石井十次先生のことばを体現したそのものです。世の中には、ほんとうにすごい人がいるものです。

振り返って、私を含め大部分の人々は、そこまでの忍耐力もなければ努力を続ける根気強さも持ち合わせていません。それでも、「よいと思ったことは本気になって取り組んでみよう。そうしたら何か変わるかもしれない。」さやかさんの活動は、私たちにそう教えてくれているようで、どこからか力がわいてくるような気がします。そして、あらためて石井十次先生のことばが思い出され、胸に強く響き、せまってくるのです。

石井先生のことばで、思い出した話があります。私のとても好きな話で、それを紹介させていただきこの稿を閉じたいと思います。

ある男の人が、海辺の保養地のホテルに宿泊していました。翌朝、目覚めた彼は、バルコニーから海岸を眺めていました。海岸は早朝の光を浴びて、きらきら輝いていました。彼は、海岸まで散歩することにしました。

海岸に着くと、きらきら光っているものの正体がわかりました。何百何千ものヒトデが、夜のうちに砂浜に打ち上げられていたのです。窓から見えたのはこのヒトデでした。

ふと気がつくと、波打ち際に一人の男の人がいます。その人は、腰をかがめてはヒトデを拾って、海にもどしていました。ヒトデを海にもどしている男の人のそばに行くと、彼は声をかけました。

「そんなことをなさっても、無駄な努力でしょう。こんなにたくさんのヒトデを全部救うことはできないでしょう。無駄なことではありませんか。」

男の人は、そのことばに気にするようすもなく、手を休めずにその作業を続けました。そして、腰をかがめ、またひとつヒトデを海にもどしながら、こう返事をしました。

「また一つ助かった。」

参考 栗山さやか著 ひとりではじめたアフリカボランティア 金の星社

「知ってるつもり」 1992年 9月13日 放送 日本テレビ

「児童養護施設にいる人はかわいそう」はもう違う

～モデル・田中れいかさんとSさんが訴えること～

編集委員 松下 さおり

「児童養護施設にいる人はかわいそう」

スマートフォンニュースで、この題目の記事が目にとまりました。そして、田中れいかさんの著書「児童養護施設という私のおうち」の存在を知り早速、購入しました。

1 田中れいかさん 1995年生まれ（現在27歳）

家庭の事情で、7歳から18歳まで児童養護施設「福音寮」（世田谷区）で暮らす。18歳で施設を卒園、奨学金を借りて短期大学へ進学し保育士資格を取得。進路に迷う中コーチング（相手の話に耳を傾け、観察や質問、時に提案などをして相手の内面にある答えを引き出す目標達成の手法のこと）に出会い「今やりたいことをしたい」と思い立ちモデルの道へ。

ミスユニバース茨城県大会準グランプリを受賞。現在はモデル業のかたわら、社会的養護（事情があつて親元で暮らすのが難しい子供たちを、国の公的責任で保護・養育し、その家庭について支援すること）の理解を広める活動をしている。

この著書は、田中さんの体験を通して児童養護施設の子供たちの生活、親との交流、施設職員との関わり方、進学事情、卒園後の問題、その時々著者の気持ち等詳しく書かれています。

「自分は生い立ちを悔やんで、被害者意識というか一種の悲劇のヒロイン的に自分を思っていたけど皆も大変で、それでも生きているってわかった。そこから、じゃあこれから自分の過去は変えられないけど明日からどんな自分になりたいか考えて行こうという思考になって、そこから変わって行った」とあります。印象的なことばです。

出自に関係なく、誰でも好きな自分になれることを話しています。

2 Sさん 友愛園を卒園し岡山理科大学に通う2年生

今年の5月号「ゆうあい通信」6頁に、Sさんの手紙が掲載されていました。大学に入り、施設にいたことを知ることになる先生や友人の言動から「親と生活出来なかったからかわいそう」と思われていることを感じ取りました。

しかし、Sさんは「家に帰ったら必ず出迎えてくれ、夜遅くなくてもご飯が用意され、弁当を作ってくれ下さる、怪我したら病院にも連れて行って下さる、何不自由なく過ごしてきました。私は、施設で生活してきたことを、誇りに思っています。施設に入れてくれた親に感謝したいです。恥ずかしがらず堂々と生きています。大学に通わせていただいていることに感謝し、日々精進していきます」と綴っています。Sさんのこの言葉に救われ、報われる思いです。

3 「児童養護施設にいる人はかわいそう」はもう違う

私は「石井十次の会」に入会して2年になります。

友愛園の子供たちへの支援の輪が広がるように活動していますが、田中れいかさんやSさんの言葉は感動と活動の励みを与えてくれました。

「児童養護施設にいる人はかわいそう」はもう違う。

児童養護施設で暮らす子供たちが、田中れいかさんやSさんのように出自に関係なく堂々と生きていき、自分の夢を叶えることを心から願っています。

《 お し ら せ 》

★新会員のご紹介（敬称略）

【高鍋町】宮下 晴彦

【東京都】高木 正彦

★ご寄付をいただきました（敬称略）

【宮崎市】日高 亜紀

【都城市】松浦 敬子

【西都市】那須 政治

【東京都】高木 正彦

ここまでの掲載者は編集委員会開催の都合により8月20日までのものとしています。

★お知らせ

Googleのストリートビューで、研修館と資料館の屋内パノラマ画像をみるができるようになりました。お手持ちの携帯電話で下記のQRコードを読み取って下さい

「マップ」が開いたら「写真」から「ストリートビューと360°

ビュー」を選んでください

友愛社のホームページにもリンクが貼ってあります。



● 編集委員会近況報告※その1

編集委員会は毎月末に方舟館にて開催しています。

①ちなみに6名の編集委員を紹介

竹之下 悟 編集委員長（西都市）

徳地 順子 編集委員（高鍋町）

石川 正樹 編集委員（高鍋町）

松下さおり 編集委員（宮崎市）

黒木 三鶴 編集委員（西都市）

西村さと子 編集委員（高原町）



8月の編集委員会

本年度から黒木三鶴委員と西村さと子委員が新加入。

そして「むつび」は今回でめでたく300号。四半世紀の歴史があります。

その時々先輩編集委員諸氏の努力の賜。これまで築いて下さった成果を継承発展させるべく力を合わせて取り組んでいきます。

②業務は、会則に次のように定めています。

「石井十次の会」主宰の「むつび」4頁分の内容に関する企画・依頼・取材・校正・発行等

会員や有識者への原稿依頼は年間計画に基づき進めています。もちろん十次の教えを基盤とした執筆をお願いするのですが偏りのないよう公平性も重視しています。

★編集後記

「むつび」巻頭は宮崎市代表教育委員の今門幸藏氏から玉稿をいただきました。現代版十次「栗山さやか氏」を私も調べてみたい。ありがとうございます

編集委員会近況報告は来月号でその2を予定しております。

※文責 竹之下 悟

★10月号の通信発送作業

10月11日（火）9時から

12日（水）9時から

コロナの感染状況により中止する場合があります

この会報は、宮崎県を中心に全国1700余の個人・団体に毎月送付しています。

社会福祉法人 石井記念友愛社
後援会「石井十次の会」

☎ 884-0102

宮崎県児湯郡木城町大字椎木 644-1

TEL/FAX 0983-32-4612

メール yuuaisya-jyuujinokai@kijo.jp